

市民研会員から寄せられた

## 2016年 私のおすすめ 3作品

締め切り 2017年3月21日、到着順に掲載

### ● 杉野実

#### 1◆ スタニスワフ・レム『ソラリス』（早川書房）

知る人ぞ知る、とっていいのかな、まあSFという分野自体がまだまだマイナーだし。でもこの小説は、SFのわくをはるかにこえた、「世界文学史上の記念碑的作品」といってもいいと、個人的には思いました。ただ「他者との交流」という主題はいたって純文学的ながら、道具立てはといえば「他者の思念を实体化する」能力をもった惑星ソラリスの「海」と地球人の交渉といかにもSF風。「ソラリス学」なる架空学問の歴史に想像をかきたてられ、私も少々理屈っぽいことを考えてみました。ソラリス学者らは、「海」自体が一個の巨大な知的生命体であって、長い年月をかけて「実体化」能力を進化させてきたと考えているようですが、「自分」ひとりしかいない環境のもとで長寿の個体がみずから進化をとげることはありえないと、私は思うのです。すなわち、実際に進化しているのは「海」そのものではなく実体化された個々の思念の方だ、諸「実体」がたがいに影響しあってたがいに高度化するのだ、というのが私の仮説です。実体化してできた「女性」が、「私を生んだものはなにを思って私を生んだの？」といったことが、これをうらづけていると思います。

#### 2◆ Living Knowledge 7 (22-24 June 2016, Dublin)

いってきましたアイルランド！サイエンスショップその他「市民科学」の交流をすすめるヨーロッパの団体が主催した会議に、おこがましくも市民科学研究室の名代として参加しました。おかげさまで、電磁波調査やら、またメーリングリストでの「エスカレーター論争」やらにふれた私の発表は、予想をこえた好評を博することができました。私の発表は質疑応答も入れて15分程度でしたが、他の内容としては1時間半のワークショップなどもあり、英語を母語としない私にはそれなりにしんどいものではありませんでした。アメリカの大気汚染や水質汚濁に関するワークショップなど、本当についていっただけで大変で、情報

公開や学校教育に関する質問をひとつふたつするのがやっとでしたが、その質問が「流れをかえた」と他の参加者からみとめられたのはうれしかったですね。いろいろえるところがありましたが、一番残念に思うのは、私と他の参加者とのあいだで会議後の交流がほとんどないことです。ある参加者の紹介で「議論」機能もついた SNS「リンクトイン」も始めましたが、そこでも観念的なことをいう人が多いし。なんかものたりないのですよね。

### 3◆ ヤーコブ・フォン・ユクスキュル『生物からみた世界』（岩波文庫）

一部の生物学研究者（最近では福岡伸一さんら）に多大な影響をあたえながらも、生前からめぐまれず、なんと 60 すぎてようやく定職についたというこの著者を、みなさんをご存知でしょうか。「生物はそれぞれが独自の世界に生きている」と、こうことばでいってしまえば「なにをあたりまえのこと」といわれそうですけど、ユクスキュルのすごいのは、その（普通なら人間には非常に理解されにくいであろうと思われる）「独自の世界」を、臨場感をもっていきいきとえがきだしてみせるところなのです。「しげみで哺乳類が通るのをまちかまえる吸血ダニにとっては、酪酸の化学的的刺激と体温の熱的刺激が、世界のすべてだ」、これがしばしば言及される例です。「ダニ」をとりあげているというだけで十分新鮮でしょう。対して「独自の世界」を「環世界」と名づけたことなどは、ほんの付録にすぎないのかもしれませんが。以前海の生物を観察したとき、バケツの中のイソギンチャクとウニと巻貝とヤドカリが、はじめはたがいに「相手も自分と同じ生き物」と気づかず、たがいに相手を障害物あつかいしてぶつかりあっていたよなあ、なんてことを思い出しました。

## ● 吉岡寛二

### 1◆ 映画「君の名は。」新海誠監督

『君の名は。』のどこがいいのか？と聞かれると困るのですが、見る人によってさまざまだと思います。一見の価値は十分にあると思いますから、まあ見てください。国内への興行収入は「千と千尋の神隠し」に次いで第二位らしいですが、世界での興行収入では日本歴代一位になりました。世界に誇れる日本アニメとしては、手塚治虫、宮崎駿に次いで三人目になります。日本の良さを世界に伝えるクールジャパンの一つとして、とてもいいと思います。

### 2◆ 「人工知能は人間を超えるかーディープラーニングの先にあるものー」

（松尾豊著、角川 EPUB 選書、2015 年 3 月）

自然科学系の本をおすすめするのは初めてです。囲碁の世界では、アルファ碁が韓国のイ・セドル九段に 4 勝 1 敗とニュースは、日本を駆け巡りました。将来は、人間の仕事が人工知能にとってかわられ、さらに人工知能に支配されるようになるのではないかと危惧する人もいます。このような考え方に対して、「技術の進歩に対して非常に楽観的な」著者の説明には大賛成です。

### 3◆「大山玉宝美術館」(三重県志摩市志摩町)

中国の玉宝を集めた美術館です。中国の皇帝がその権力にあかせて作らせていたものですが、共産党が支配する中国では、展示どころかいつ破壊されてしまうかもしれません。展示員の説明によれば、ちょうど日中回復をした直後で、(株)大山真珠店が譲り受けることができたとのこと。非常に交通の便が悪いところにあるため、年間でも一万人に達しないだろうと思います(私の想像に過ぎません)。一年前は北海道の日高にある「太陽の森ダイヤモンド幻想美術館」を紹介しましたが、そこに比較すれば不便さはマシですが。

#### ● 鈴木綾

##### 1◆「かさねちゃんにきいてみな」有沢佳映(講談社)2013.5 (ネタばれお許しを)

第47回・日本児童文学者協会新人賞(日本児童文学者協会)第24回・椋鳩十児童文学賞(鹿児島市・鹿児島市教育委員会)2014年度の受賞

「かさねちゃんにきいてみな」は小5のユッキーの視点で、ある登校班の11月～12月・・・を描いた作品。

個性的メンバーだらけの班を毎日無事に学校まで連れて行く最強の班長かさねちゃんへの憧れと、その跡継ぎに自分になれるか、一人っ子ユッキーが、悩みながら綴る登校班日記。小心者だが気立てのよさげなユッキーに感情移入しつつ読みながら、大人の私は母子家庭でネグレクトだろうリュウセイの毎日が気になる・・・ついに年末に向けて「保護」されてしまったリュウセイに、現実の「今」のリアルを感じて胸が苦しくなった。

出版直後に読んだ時から心つかまれた本だったが、この度、地元の小学生読書会の「課題本」になったので、コーディネーター助手?として参加するために再読。子ども達はどんな風にリュウセイを見るのだろうとドキドキしながら読書会に参加したら、子ども達はシンプルに「おもしろい」「なんだろう」と感じたことを語る。メチャクチャなメンバー男子のエピソードに笑い、本当にすごいかさねちゃんに感心し、まるで隣の小学校のような現実との地続き感を味わっていた。そして、保護され祖母宅に預けられたリュウセイに戻ってきてほしいというユッキーの気持ちの変化=成長を素直に受け止めていた。

子どもは、子どもに見える範囲で、ちゃんと受けとめ、大事なことはちゃんとわかるのだなど、深く感心した。

作品の終わり、4月、リュウセイは戻ってきている。そして一番後ろを歩いている!?リュウセイが副班長???マユカじゃないの???・・・1月から3月、リュウセイはどこで暮らしたのかな。続編は出ないのかな。心残り。

## 2◆『この世界の片隅に』

大ヒットしたので、今更かとも思いますが、本当に見てよかったので。見ていない方はぜひぜひご覧ください。

原作のマンガ(全3巻 こうの史代・作 双葉社)が大好きなので、映画化ってどうなんでしょう、と思っていたのですが、原作のまま、動いて、しゃべっている感じで、主人公すずを女優のんが声優として演じるのも、はてどうか?と思ったけど、見たら他の誰ももう考えられないくらい、ピッタリ。終戦の詔勅を聞いて激怒するシーンなど、その嘆きの深さに震えました。(アニメとしてとてもいい出来だし、のんはすごい女優さんだと改めて感服。ご活躍の場が増えるようお祈りしています。)

作中で描かれる戦時下のフツウの物がどんどんなくなっていく日々と、それに対抗して生活していくための「工夫」のすごさ、笑えるくらい。そして雨のように毎日毎日毎日爆撃が続いていた呉の街。そして何もなく過ぎていた広島。誰が生き延びるか、怪我をするのか、誰にもわからない。誰も死んでほしくないのに、あっけなく死ぬのです、戦争では。シリアの子ども達は、こんな毎日なんだろうか、と思う。爆弾が降ってくる街で生活するしかない。戦争になってしまったら、逃げだせないんだと、本当に身に沁みてわかる映画でした。

廃墟のヒロシマで孤児になつかれて連れて帰るラスト。そんな風に生き延びた子もいたのでしょうか。毎日の生活を奪われないように、家族の誰も爆弾で殺されないように、今、できることをしていかないと、と思い、今、生きている自分と家族と友人とそのまた友人を思う。どこまでもその輪は広がって、地上の誰もが誰かの家族で友人。大事な人同士。それを忘れちゃいけない、庶民は!

## 3◆「子どもの「いや」に困ったとき読む本 どうやってしつければいいの？」

(大河原 美以 (著) 大和書房)

小学校に入ってキレてしまう「よい子」が続出しているのは、発達障害の増加だけでは説明できない、幼児期の「負の感情」への不適切な大人の対応が、そういう「仕組み」を脳に作ってしまっていると著者は言います。子どもの「怖い」「イヤだ」「痛い」「悲しい」等の「負」の気持ちは、身近な大人に抱かれ、その感情を名づけてもらい、慰めてもらいながら、子どもが大丈夫だと実感する経験を積み重ねることで、子ども自身が「負の感情」に安全に対処できるようになります。ところが、そういう感情を抱くこと自体を「よくない」と大人が抑えてしまうと、大人の反応に合わせて生きるしかない子どもは「第一次解離」により、そういう負の感情を「なかったこと」にして過ごすクセがついてしまう。しかし負の感情は生きる本能から生じるものなので、抑え込むことは必ず将来、「爆発」することになる。それが今、小学校の教室で起きていることなのだ。

子どもが負の感情を安全に持っていられるようになるためには、負の感情の存在の否定でなく、その感情を上手に言語化できるよう、子どもと信頼感でつながった大人が安全を保障してあげることが大事、という考え方です。そういう子どもの気持ちを安全に抱えていけるようにしていくことが、親にも保育者にも先生にも求められている。そして、子どもの育ちについては、気づいた時からやり直せる、というのがこの先生の一番素敵なところかなと思いました。

## ● 瀬川嘉之

最近、自分がろくに読んでもいないのに人に勧めて感謝されたり喜ばれることがときどきある。その路線を延長させて自分がほとんど読んでいないのに、私のおすすめ3作品を書くことにした。趣旨に反しているけれど。

### 1◆ ユークリッド原論

数の掛け算は複数回の足し算で説明できるけれど、量の掛け算はどう説明するのか。量はすべからく比である。だから、自由に何倍にもできる。原論に幾何学・図形の話と数と量と比の話があるのは不思議ではない。九九を暗記して掛け算ができて問題が解けるからわかった気がしているのが大間違い。

### 2◆ マルクス資本論

経済も政治も社会も時間と空間と人間と金と物とでできた構造なのだと、説明してくれているらしい。マルクス主義は世俗化されたキリスト教だそう。似ているどころか同根で発展させただけ。だから、セクトができて悲惨なことや墮落が起きると納得。それにしても、読むに値する書であろう。

### 3◆ キリスト聖書

論語は孔子の話。釈迦の話が経典。イエスの話が新訳聖書。生きた人間がそこにいる。神は自然の別名。だから、自然科学は神への愛。キリストは人間ではない。天皇は人間ではないのに人間宣言をして、象徴になった。何の象徴なのか、毒ガスや細菌兵器を製造使用して、「頻に無辜を殺傷し、惨害の及ぶ所、真に測るべからざるに至る」象徴。この一言で原爆を使用した米国を縛り、日本を復興させたのだから、その罪と闇は深い。

## ● 上村光弘

1 ◆ Pub the Eagle

2017年2月、英国に行った。受講している和光大学ばいでいあ「イングリッシュガーデンとカントリーサイド」の岩本陽児先生率いる「英国の春告げ花“スノウドロップス”に恋をして」に参加したのだ。退院していまもなお自宅療養中の身で海外に本当に行けるとは思わなかったので、とてもうれしかった。なかでも行きたかったのがケンブリッジ。そのために、ツアーのみなさんに合流する前の3日間、ケンブリッジに行った。

ケンブリッジの中でも一番良かったのがこのパブ。ワトソンとクリックがDNAの二重らせんについて議論した場所。まさにそのテーブル（14番）でランチした。まさかこのテーブルに座れるとは！ランチをしていた1時間ほどの間に中国、フランスなどからの旅行者が記念写真を撮影に来たので、そのたびごとにうつらないように体を傾けた……

2 ◆ 熱川バナナワニ園

<http://www.i-younet.ne.jp/~wanien/index1.htm>

2017年1月に伊豆への「里山合宿」ツアー（※）で参加したときに、本館・分館に足を運んだ（※注：和光大学の岩本陽児先生の授業「里山保全の理論」「里山保全の実際」の受講生・卒業生有志によるツアー）。ワニがいるのかなぐらいで、そう期待して行かなかったが、いい意味で期待を裏切られた。時間不足でワニはまったく見なかった。見たのはひたすら植物だけ（多様な熱帯スイレンが咲いている時期だったが、それ以外にもいろいろ）。あんなにたくさん温室があったとは！ 駅からバナナワニ園を見るだけでは絶対気づかない。夢の島熱帯植物園よりずーずーずーっといい！！

3 ◆ 映画「イミテーション・ゲーム エニグマと天才数学者の秘密」

ナチスドイツの暗号を解読し、コンピュータの基礎付けをおこなったのが天才数学者アラン・チューリング。この映画は、チューリングがどういう人物か知るのにつけて。41歳の若さで亡くなったが、今も生きていたら、ひょっとしたら世界が変わっていたかもしれないと思う。

4 ◆ 映画「この世界の片隅に」

市井の結婚したての若い女性の目線で、広島原爆投下を描いたアニメ。戦争（原爆）の恐怖をあおるのではなく、日常生活をたんと紹介している。右手をなくしたことは衝撃的なのだが、ひとつのエピソードとして挿入されている。アニメとしても秀逸だと思う。クラウドファンディングで約4000万円で作られたというのも驚いた。

## 5 ◆ 高橋源一郎 (2016) 『丘の上のバカ ぼくらの民主主義なんだぜ2』朝日新書、朝日新聞出版

お気に入りのラジオ番組のひとつにNHKラジオ「すっぴん」がある。その金曜日はパーソナリティが高橋源一郎さんで、「源ちゃんのゲンダイ国語」というコーナーが一番好きである。それで、高橋源一郎さんの本を読みたいということで買った。入院中に世の中に何が起きているかを知るのにすごく役立った。一篇が短いのも、疲れずに読んで考えることができてよい。また、注がいっぱいついてるので、次に何を讀むかの参考になる。

## ● 角田季美枝

大学で教えているので、大学生に読んでもらいたい領域と趣味双方から10冊ほど選んでみました。こここのところ投稿できてなかったもので、3年分ということでご容赦ください（紹介したURLアドレスは2017年3月21日現在）。

### 1 ◆ 環境政策関連

「環境と社会」のかかわりに関する担当科目を受講する大学生におすすりめしたい、最近の本3冊です。

#### 1) 岸由二、柳瀬博一 (2016) 『「奇跡の自然」の守りかた：三浦半島・小網代の谷から』

ちくまプリマー新書、筑摩書房

自然「保護」なんて、都市に住む自分と関係ない！ 都市に自然なんてあるもんか、と思っている学生に特に読んでほしい1冊です。また、保護するなら開発を推進する政府や企業に対して反対運動しかないでしょ、と思っている人にも読んでほしい本です。

現在、神奈川県の三浦半島にある小網代の谷はおそらく首都圏でもっとも生物多様性が豊かな場所ですが、1980年代にゴルフ場開発が決まっていた場所でした。自分たちが残したい「自然」をどうしたら一番残せるのか、ということを、いまから30年以上前にビジョンを描き、そのためにどうやって味方を増やしていくか、実際にその場所にどうかかわっていくかといった、エッセンスが紹介されています。ひとことでいえば、開発反対運動をしなかったことで小網代の谷は保護されたのです。信じられない人はぜひ小網代の谷に一度足を運んでみてください。

ただし、小網代の谷は近郊緑地特別保全地区に指定され、神奈川県横須賀三浦地域県政総合センターが管理しているため、利用にあたっては神奈川県の小網代のホームページに記載されている諸注意を守る必要があります。

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/p820028.html>

また、二人の著者が活動しているNPO法人小網代野外活動調整会議ではボランティア・イベントなどいろいろ実施しています。参考にしてみてください。

<http://koajiro.org/>

## 2) 沖大幹 (2016) 『水の未来：グローバルリスクと日本』岩波新書、岩波書店

「水」という公共財は、日本ではあまり意識化されていません（二酸化炭素よりは身近に感じるかもしれませんが）。それが「先進国」ではあたりまえだからなのですが、日本においても水は危機に瀕しています。もちろん、グローバルに見ても危機なのですが、危機の質が異なっています。水にまつわる新しい概念（「ウォーター・フットプリント」「バーチャル・ウォーター」）の生成や国際標準化、気候変動適応策の必要性などバランスよく解説しています。

## 3) 中川毅 (2017) 『人類と気候の10万年史：過去に何が起きたのか、これから何が起こるのか』

ブルーバックス、講談社

今回、紹介する中でもっともおすすめが本書。著者の専攻は古気候学。長大な時間スケールから地球や地域の気候変動を自然科学がどう分析しているのか、それをもとに今後の気候変動による人間社会への影響をどのように考えていけばよいのかを、以下のスタンスで丁寧にわかりやすく紹介しています。「誰が悪かったのか、あるいは悪くなかったのかの話は本書では取り上げない。自然科学は、善悪の判断に対しては本質的に無力である。その代りに考えたいのは、長い時間を視野に入れることで、まったく違う顔を見せるという事実である。」（プロローグ、p.3）

とくに2006年から開始した福井県水月湖の研究プロジェクト（年縞の分析）の紹介は白眉ですが、古気候学の内外の知見をふまえて、「狩猟採集は非効率だったのか」「先行き不透明な時代の生き残り戦略」という小見出しに表されるように、気候が安定していない時代の合理的な生活とはどういうものを考察している点がおもしろい。

2) 3) を併せて読むと「なぜ日本では気候変動適応策が進まないのか」というリサーチ・クエスチョンが出てきます。2) である仮説が示されていますが、さて、どうでしょうか。仮説を考えて検証してみませんか、と、学生に問いかけてみたいと思っています。

### 2 ◆ デモクラシーについて

ここでは自然科学では結論が出せない「価値観の多様性」や「合意形成」あるいは「コミュニケーション」について考えるための、最近の本3冊を紹介します。

## 4) 水島治郎 (2016) 『ポピュリズムとは何か：民主主義の敵か、改革の希望か』

前著の『反転する福祉国家：オランダモデルの光と影』（岩波書店、2012年）では、「福祉国家」＝善という近代史の枠組みに対して、オランダをケーススタディとして、多面的な見方ができることを示してくれましたが、今回はポピュリズム＝悪との見方に対して、現在のヨーロッパのポピュリズムの潮流はそれだけでは分析できない、と実証しています。しかも新書版と入手しやすいサイズで公表してくれたので、大変ありがたい。なぜアメリカではなくヨーロッパ政治に学ぶことがおもしろいのかという点も、政治の動向を丁寧にひもといて紹介していますので、「デモクラシー」の本質とは何かを考える入門書になっています。

## 5) 赤坂真理 (2014) 『愛と暴力の戦後とその後』講談社現代新書、講談社

「政治なんて興味ないよ、選挙に行ったら自分の票は生きないじゃん!」といたい学生には、こちらがおすすすめです。あなたは日本の近現代史について何をどう学んできましたか?と聞くと、「受験に関係ないので、学校では学んでない」という返事が、理系大学だけではなく文系大学の学生からも返ってきます。どうやって日本の近現代史を学んでもらえるのか、いろいろな方法がありますが、個人史とからめて近現代史を学ぶというのは有効な方法のひとつです。

この本の著者の赤坂真理さん(1964年、東京生まれ)は、まさに自分史をつきあわせて——「自分の母」「日本語」「空き地」「安保闘争」などの自分の関心を引いたトピックから——日本の近現代史をひもといていきます。そして最後に「まったく個人的であり、だからこそ奥底で普遍に通じる、そんな力」が、自分が反応したものに共通している、と、ふりかえています。

学生は赤坂さんより若いので、どこまでリアリティをもって近現代史をひきつけられるか未知数ですが、一度は試してごらん、と、レポート課題を出してみようかと思っています(先生の権威や特権でできる方法です!)

## 6) 橋本治 (2017) 『たとえ世界が終わっても: その先の日本を生きる君たちへ』集英社新書、集英社

赤坂さんより20歳ほど年上の橋本治さん(1948年生まれ)は、自分の人生の節目に「これからの時代や自分の進むべき方向性」を考えて本を公表してきました(41歳だった1989年=昭和の終わりに『89』を、52歳に1900年から2000年までを1年刻みに語る『二十世紀』を出版)。本書は「『二十世紀』の完結篇みたいなもの」(まえがき、p.6)だそうです。ただ、今までと違うのは、インタビューという形式で展開していることです。

これは、「まえがき」をかいつまむと、こうなります。「自分の残りの人生はどうでもいい消化試合で世界が終わってもかまわないが、そういつてしまったら無責任。ただ、説明するには受け手が納得するには受け手がどれだけのことを分からずにいるかを知らないとできない。しかしもう一人でそれを探る体力がもうないので、インタビューでやろう」。インタビューは橋本作品を精読しているフリーライター(2016年で51歳)と編集担当者(2016年で32歳)。そのため、橋本さんの語りよりそのレスポンスもおもしろく読める仕立てになっているのです。

日本の古典文学に非常に長けている橋本さんによる日本社会の分析は、あいかわらず鋭い。それをふまえたいくつかの主張の中から、もっともこの本でいい良かったことかな?と感じたことを引用しておきます。

「(世界の状況が: 引用者注) 複雑になっちゃったことは事実だから、その「複雑」をどう考えていくかということが必要なんですね。もう「簡単にすませよう」は通用しないのさ。

だから、個人の欲望から離れた、「損得に左右されない」論理で、世界や歴史を見つめなおすところからスタートし直すしかない。そういう時間のかけ方が必要なの。それをしないと、お互いに考え方が違う人間たちが、共通の土台の上で議論することは出来なくなる。そういう土台なしには「大きなもの」に変わる次の社会の方向性や、実現のための方法論だって、見えてこないわけじゃないですか。」(pp.219-220)

私がいつも舌を巻くのは、橋本さんが非常にリアリストであるということです。「こんなに膨大なこと勝手に言っといてどうしてくれるんだ。こっちの頭に入らないし、混乱するだけじゃないか」って言う人を想定し、それに対して「めんどくさかったら入らない分を忘れちゃえばいいんだ。人間の頭は忘れて、一度頭の中を通ったものは、へんなきっかけで思い出したりするもんだから、忘れたって平気だよ」と、付け足しているのです！ すごい!!

平成生まれが大学に入学する昨今、橋本さんのメッセージは10代、20代の心にどう響くのか、是非聞いてみたいところです。

### 3◆ その他

私は授業で参加型アプローチをすることが多いのですが、自己紹介のときによく使うのが「私のお気に入り」。A4の紙を縦3つ横3つと9つに折り、真ん中に自分の名前あるいは呼ばれたい名前を書き、それ以外のマス（8つ）に自分のお気に入りのモノや行動などをひとつずつ埋めて書いてもらうというもの。私はお気に入りに「本ないしは活字」「音楽」と書くことが多いので、今回はその二つを組み合わせ、音ないしは音楽関係の本プラスアルファを紹介します。

#### 7) 智内威雄 (2016)『ピアノ、その左手の響き:歴史をつなぐピアニストの挑戦』太郎次郎社エディタス

2001年に局所性ジストマで右手が使えなくなったピアニスト（1976年生まれ）のピアノ歴、治療・リハビリ歴、現在おこなっている「左手のアーカイブ活動」の紹介。左手のピアニストというと、日本ではフィンランド在住の館野泉さんが有名ですが、この本ではピアノ教育というところまで論じているので、左手でピアノを弾きたいという人にはより参考になります。

いわゆるクラシックの世界でピアノ以外の楽器（たとえば弦楽器）をバリアフリーに演奏するにはまだまだ時間がかかりそうですが、左手のピアノで開拓できる音楽世界がそのステップになるといいですね。

#### 8) 大友良英 (2014)『学校で教えてくれない音楽』岩波新書、岩波書店

#### 9) 野村誠、大沢久子 (2006)『老人ホームに音楽がひびく:作曲家になったお年寄り』晶文社

8) 9) は、まったく音楽を専門的に習ったことがないという人びとに対して、即興演奏で音楽を楽しむワークショップを実践している事例です。

音楽を遠くしているのは学校教育なんだなあーということがつくづく実感できます。どこで学んだらいいのかということ、誰に、どこで問えばいいのかわからない状況です。まずは楽しむ場をつくることのできるいいかもしれません。ただ、音楽に関心がなくなってしまったいろいろな大人がそこに参加するハードルをどう下げていけるのかは大きな課題ですし、それを誰がするのかということはさらに難問です。

## 10) 川端裕人 (2014) [「研究室に行ってみた。国立精神・神経医療研究センター 神経研究所 本田学」](#)

これは人間の耳には聞こえていない「高周波音」を医療に活用するよう研究・実践している本田さんへのインタビュー（7回）の記録。インタビュアの川端さんが自身の知見をふまえて話を引き出し、多面的に掘り下げてまとめているので、非常に読み度があります。

9) 10)を併せて読むと、病気、治療、老化という現象（つまりは身体の状態ひいては人間社会）に音環境がどう影響を与えているのか、その影響を今後どう変えることができるのかは科学技術だけで考えられないということもよくわかります。

### ● 白井基夫（医療生協さいたま職員）

#### 1◆ B&Wのスピーカー

作品ではないモノのが、昨年の第1位です。スピーカー、Bowers & Wilkins CM1 S2。

買う予定もなく、興味半分で大型電器店の試聴コーナーに寄り、数万円の製品をさんざん試聴し、「もうちょっと出すと、どんなのがありますか」と聞いたのが決定的でした。その音の解像度の高さがすばらしくて。自分にとっては、10万円を超えるスピーカーなんて高級品、ぜいたくの極みのような気がしていました。

これによって、それまで聴こえなかった音までとらえることができたうえ、どのあたりで鳴っているかという、オーケストラ内の距離も見えてくように感じました。別世界、別次元の音楽環境になりました。その店の店員さんによれば、小澤征爾が身近な「勉強用」にこの機種を選んだそうですが、「なるほど」と思いました。

とくに、チェンバロの音がなまなましい。何メートルか前で弦をはじいているように聴こえてきます。繊細な音の再現力は抜群で、古楽器には強いと思います。古楽器ファンとしてはうれしい限りです。

ちなみに、アンプ・CDプレイヤー・チューナーは、もともとあるONKYOの一体型。「スピーカーを変えるだけで十分です」との店員さんのアドバイスどおりです。

#### 2◆ グルベローヴァ & アファナシエフ

リサイタル。11月22日（土）、川口リリアホール（メインホール）で、エディタ・グルベローヴァ。70歳になろうとする人は思えない、声の輝き・つや・伸び。超A級。

前半のチャイコフスキーとドヴォルザークの歌曲だけで胸がいっぱいに。ドヴォルザークは、CDで聴いていて親しんでおり、スロバキア生まれの彼女にとっては、ほんとうに大事な作品なのだと感じました。東欧の森や丘、川、街並みや草原が見えてくるようで、彼女の心の言葉として聴きました。

20年以上前からの念願が、やっとかないました。年齢が年齢だったので、「間に合った」ことは幸運でした。

ついでに、同じリリアホール（音楽ホール）での、ヴァレリー・アフアナシエフのベートーヴェンの《悲愴》《月光》《熱情》、10月20日（木）、についても。

強く、深く、不気味なくらいに巨大な演奏でした。アンコールは、モーツァルト：幻想曲二短調、深い谷にどんどん降りていくような怖さと、天使が飛翔する絵のような美しさが共存。奥底知れぬピアニストです。腰から背中を通して指までガッツリ伝わる全身のパワー（クルマでいえば、5000cc/500ps?）、音を深く強力に刻み込む左手、そして、重たいハガネの響き。忘れがたい体験でした。

サイン会では、照れくさそうに、わずかにほほえむ姿が。出版されて間もない『ピアニストは語る』（講談社現代新書）にサインしてもらいました。正直に自分の想いを伝えるべく、真正面から挑んだベートーヴェンだったのでしょう。人がらを知れば、聴き方が変わります。

### 3◆ 鹿島茂さん

これも、作品ではありません。11月21日（月）、フランス文学者の鹿島茂さんと、作家・評論家の鈴木邦男さんとの対談です。

何年も前から鈴木さんには、「鹿島さんに会いたいののでつないでほしい」と依頼されていましたが、自分には手がかりがありませんでした。たまたま Twitter で鹿島さんの個人アカウントからフォローされたのを見て、すかさずダイレクトメールで対談を申し込み、即、ご快諾でした。

鈴木さんは、鹿島さんが三島由紀夫と東大全共闘との対論の場にいたと聞き、かなり食いついていました。三島といっしょに命を絶った森田必勝は、早稲田大学のと看、鈴木さんが民族派に引き込んだ人物であり、鈴木さんは三島に何度も会っています。また、鹿島さんの三島作品に対する造詣もたいへんに深く（小説も評論も戯曲も）、これはもう、当事者どうしの世界ともいえます。

数多くの個人全集&文学全集を読破している二人ですが、話題は、トランプ大統領登場の背景、ヨーロッパにおける右派の台頭、フランス革命の評価、近代日本のアジア主義の実像などについても、おおいに盛り上がりました。自分としては、むかし読んだ河盛好蔵のことを聞けてうれしく思いました（河盛は、若き学者だった鹿島さんが共立女子大学に勤務していたときの大先輩）。

鹿島さんの博覧強記ぶりには舌を巻きました。自分の全身の産毛までアンテナになるような感じがするほど、刺激的な4時間でした。

なお、鹿島さんはこの2月、『神田神保町書肆街考—世界遺産的“本の街”の誕生から現在まで』と『太陽王ルイ14世—ヴェルサイユの発明者』という2冊の大著を上梓しています。どちらも縦横無尽に物語が紡がれた、スリリングな作品です。

## ● 権上かおる

## 1◆『だれがタコマを墜としたか』 川田忠樹（1975）（株）建設図書

著者は、本州四国連絡橋などを架橋した大手橋梁メーカーである川田工業の会長（現在）である。この事故は1939年に米国ワシントン州のタコマ橋で起きた。吊り橋が強風に煽られ、上下に振動したり左右に振じられたりして破壊される映像を思い出す方もあるかもしれないが、たまたま記録フィルムを回していた時に、墜ちたため、一部始終の映像がのこされていたことによる。事故調査にあたった人々へのインタビューなど、その謎を追う著者の足跡に沿った記述ではあるが、何度もどんでん返しにあう。本書は技術書ではあるが、まるで推理小説のように読むことが出来たのも仏文出身の橋梁技術者という著者の筆致による。とにかくおもしろい一言である。

## 2◆『水俣病の民衆史』 1～6巻 岡本達明（2015）日本評論社

チッソ労働第1組合の委員長であった著者が、数年前に一気にまとめたものとの記述があるが、一人の人間の成果物とは信じがたいような質と量を持っている。正直に申して、まだほんの一部しか読めていないが、その内容は息をのむ連続である。あらゆる分野の調査に通じるお手本と思う。とにかくすごい一言である。

## 3◆『戦争という見世物 日清戦争祝捷大会潜入記』 木下直之（2013）ミネルヴァ書房

日清戦争の戦勝祝賀会の1日（1894（M27）.12.09）を上野の不忍池周辺で行ったときのルポルタージュ仕立て。といってもタイムマシーンで現代と明治時代を自由に行き来する楽しい記述もある。対外的な戦争は、いかに国民の心をひとつにし、舞い上がらせる道具として活用されるかが学べる。折しもオリンピック整備を口実に上野公園の樹木がすでに200本以上伐採されたことが分かった。不忍池も立入禁止ゾーンばかりになっている。JRの公園口にバスのロータリーが造られようとしている。西洋美術館の世界遺産認定時に最も問題にされたのは、バッファゾーンが少なすぎる点だったというにもかかわらずである。（詳細：「上野の樹木を守る会」で検索。ネット署名もご協力いただければ幸いです）新国立競技場問題で、外苑の建物高さ制限が緩和され、外資のホテル計画などが軒並みである。外苑の次は上野公園なのだ。だれも責任を取らない体制は全く同様である。横道が長く失礼、話を本に戻しますと、とにかくうまい一言である。

## ● 桑垣豊

## 1◆『函数方程式概論』基礎数学シリーズ15 桑垣煥 朝倉書店 2004年復刊(初版1967年)

数学者である父の著書です。紹介する機会を失うかもしれないので、品切れになるまえに選びました。父には、大学教養課程の数学教科書など、いくつも著書がありますが、オリジナルの内容はこの教科書だけです。また、「このシリーズでオリジナルの内容は、これだけだ」とは父のことばです。

函数方程式とは、普通の方程式が未知の変数の値を求めるのに対して、未知の函数をその函数間の関係式から求めるものです。物理などでよく出てくる微分方程式や積分方程式も、函数方程式ですが、単に函数方程式というと、微分方程式・積分方程式以外のものを指します。ところで、「函数」は、戦後当用漢字に「函」がなくなったために、「関数」と書くようになりました。父は大正生まれなので函数のほうがなじんでいたでしょうが、日本数学会では今も函数方程式と表記していて、学会の分科会の名前も函数方程式です。

函数方程式の簡単な例をあげてみます。

「ある1変数函数  $f(x)$  があって、中身の変数が  $x = a + b$  のように足し算になっているとき、函数が掛け算になるような函数はなんでしょうか。つまり、 $f(a+b) = f(a) \times f(b)$ 。」

勘のいい人はわかると思いますが、指数関数です。そもそも指数関数というのは、足し算と掛け算を変換するためにできたものです。この問題で、足し算と掛け算を入れ替えると対数関数になります。

というわけで、普通の数学の専門書に比べると、ずいぶんやさしい内容がたくさん載っていますが、数学者以外の理科系の人間でも、ぎりぎりわかるか、というところですよ。挑戦してみてください。

父がこの分野を選んだのは、「そんなにむずかしくないのに、専門にしている数学者が少ないから」というものでした。世界中で函数方程式のタイトルで一通りの内容を網羅している本は、父の本とマジャーラ(ハンガリー)出身のアクゼル・ヤーノッシュ氏(マジャーラ語は姓が先)が書いた「Functional Equation」(函数方程式)だけだそうです。

アクゼルさんは、今カナダ在住ですが、30年ほど前、国際学会参加のため、日本に来たことがあって、京都で一度だけ父と会っています。日本語は、マジャーラ語と同じく名字が先なので、親近感を感じているとのことでした。レストランでは「天井」を注文。父は英語がきらいで、論文をフランス語で書いたりしていました。アクゼルさんはヨーロッパ語が5つも6つも話せるので、父とフランス語で話したそうです。一緒にいた日本人の数学者はフランス語がわからないので困っていた。当時、父が愉快そうに話してくれました。

## 2◆『詳細演習 微分積分学』塹江誠夫・桑垣煥・笠原皓司 培風館 1979年 品切れ

## 3◆『詳細演習 微分方程式』桑垣煥 培風館 1983年 品切れ

大学理科系教養課程(今の専門教育科目)の教科書です。当時は大学数学の教科書で2色刷は珍しかったようです。途中の計算を省かずに書くというのが方針だったようですが、それでも大学生には難しか

った。ほかの教科書よりわかりやすくした上で、いろんな例題を網羅する。今では、初心者用にもっと詳しい教科書がたくさん出ています。しかし、多数の例題を網羅している教科書はあまりないようです。特に『微分方程式』のほうは物理学科や工学部の学生が、具体的な微分方程式を解くときに役立つようです。

正直な話、せっかく本をもらっていたのに私もあまり活用できていません。ただ、広島原爆投下の直前に、呉市の裏山「灰ヶ峰（はいがみね）」の頂上にあった高角砲がエノラゲイを打ち落とせたのか、その検証に使いました。空気抵抗のある場合の弾道計算でも、ニュートンの運動方程式を解きます。速度に比例する空気抵抗がある場合の解は、放物線よりもずっと複雑になります。

結果は、タイミングがよければ、ねらうことができた、というものです。もちろん、三原から通報があって、すぐに弾道計算（あらかじめ計算してある数値表と、大砲内蔵のアナログ計算機で）をして、即連射しないと間に合いません。命中しなくても、至近弾で追い散らすことができたでしょうから、本当に残念です。攻撃態勢には、入らなかったようです。東隣の同様の高角砲陣地では、攻撃態勢に入ったようですが、射程外だったのであきらめたということです。

アニメ映画『この世界の片隅で』の主人公の嫁いだ家は、この灰ヶ峰のふもとにあります。私は、2011年、灰ヶ峰の高角砲跡を見るために呉駅からバスに乗り、灰ヶ峰の西の峠まで行き、そこから歩いて頂上の砲台跡まで登りました。映画に出て来たバスからの風景は、70年を経ているですが、見覚えがありました。きっと、今も同じ道をバスが走っているのです。映画では、昭和19年に灰ヶ峰に高角砲を設置した場面がありましたが、その砲弾は高度1万メートルを飛ぶエノラゲイには届きません。エノラゲイを狙い撃ちできる最新鋭120ミリ高角砲（砲弾は、長さ1メートル以上、鉛筆のようにとがっている。電動式。）に取り替えたのは、原爆投下直前です。

父の著書には、「呉市に生まれる」とあります。呉市にいたのは小さい子どもの時だけようですが、この映画に昔の呉の町の様子が出てくるというので、私は映画館に見に行きました。その後、父はわずかな滞在期間でしたが、戦時中海軍機関学校・兵学校の教官（舞鶴）だったので、呉で戦艦大和を見たといえます。この映画でも出てきますが、その存在自体が民間には秘密だったはずなので、やや疑問です。また、市街地からは見えないように覆いがあったと思います。世界最大の戦艦だったので、隠し切れず呉市民はみんな知っていたのかも知れませんが。

だいぶ脱線しました。詳細演習の本は、2冊とも品切れですが、古本であるでしょう。30年近く売れたロングセラーです。この2冊より売れ行きは落ちますが、『詳細演習 線形代数学』塹江誠夫・桑垣煥・笠原皓司 培風館 1981年は、まだ在庫があります。

## ● 石坂信之

## 1 ◆佐野洋子文、北村裕花絵「ヨーコさんの”言葉”」（副題がある本を含め、3冊あります）

講談社 2015 年-2016 年

NHK E テレで 2014 年から放映されているのをご存知の方には、私の紹介は不要でしょう。お願いですから読み飛ばしてください。テレビも見ないし、本屋さんで平積みのこの本を手にとったことがない人にお薦めします。

何がすごいのか？とどのつまり、ヨーコさんの”言葉”は、北村裕花さんの絵と相まって、これまでの誰の言葉よりも破壊力、爆発力があると私は思っています。

## 2 ◆宇多田ひかる Fantôme (CD) から「花束を君に」、「真夏の通り雨」

ユニバーサルミュージック合同会社 2016 年

NHK 連続テレビ小説（朝ドラ）「トト姉ちゃん」の主題歌になっていた「花束を君に」は透き通った空の中を優しい歌声が流れていきます。「真夏の通り雨」では自分ではどうしようもない雨が突然降ってきて止みません。心象風景が浮かんできます。

亡くなったお母様への想いではあるのですが、そういうことを抜きにして、この歌たちは、いつも私の気持ちをさらって行きます。

## 3 ◆中島林彦「古文書が語る肥後地震」

（別冊日経サイエンス「大地震と大噴火」日経サイエンス社 2016 年）から

昔、地震関係の仕事をしていた頃の話です。“伊豆の衝突”に関連する研究者を招待し、2日間の討論会を企画しました。この道の地震研究者と地質研究者が忌憚のない意見を吐露し、議論は過熱したのですが、地震研究者は現象の把握に躍りとなって、地質研究者（例えば松田時彦さん）は日本列島がどんな風にしてこんな地殻構造になり、その構造の故に地震がこの場所で起きるのだという、壮大なドラマを展開していました。私はこれらの議論を聞いていて、普段はぱっとしない地質学者の構想力にビックリしました。

東日本大震災以降、多くの地震関係者が寡黙になってしまって、「日本のどこで地震が起きてもおかしくない」という一言しか発していません。防災の面からは誰もが備えをする必要があるのですが、「日本のどこで地震が起きても・・・」という、そんな面白くない言葉は科学ではないと思うのです。

話は戻って、「大地震と大噴火」の中の14本のトピックスのうち「古文書が語る肥後地震」はなかなか面白い。ブロック断層モデルという、GPS 地殻変動データ（地表面の動き）から得られた地域区分を古文書による昔の地震に適用させて考えて見ようとしているのです。もちろんブロック断層モデルも推測に過ぎませんし、古文書による震源解析も課題が多いのですが、分野を超えてイマジネーションを持ってチャレンジするのは、黙り込んでいるより、よほど楽しいと私は思います。

## ● 永添泰子

## 1◆ コレクション戦争と文学「第17巻 帝国日本と朝鮮・樺太」(集英社)

「コレクション戦争と文学」は、作家の浅田次郎さん他が編集された、全部で20巻+別巻1、その1冊が、それぞれ700p以上もある、とても読み応えのあるアンソロジーです。収録されているのは、戦争について書かれた小説、戯曲、短歌、俳句、詩、一部ドキュメンタリー等です。

それぞれの本の巻末に、収録作品の解説、著者の略歴、関連年表、地図などが載っており、純文学だけでなくエンターテインメントものや、その時代に生きた作家だけでなく、現代の作家が、戦後に書いた作品も収録されています。

第17巻「帝国日本と朝鮮・樺太」は、子供時代に、当時日本の植民地になっていた、朝鮮半島や、千島や樺太など北方領土に住んでいた日本人や、植民地に仕事を求めて行った日本人、植民地にされた国の作家が、書いた詩や小説が収録されています。日本が朝鮮半島や樺太を植民地として治めていた当時の人が、そこでどんな感情を抱き、それぞれどのような立場で暮らしていたかの一端がわかり、非常に興味深いです。巻末に、朝鮮半島、千島や樺太島の地図や関連年表、当時を描いた絵画も収録されており、理解を助けてくれます。

他国を植民地にしていた当時の日本人は、人権意識がとても低かったようですし、植民地の人たちを見下していました。その傾向が、戦争が終わった今でも残っているのが、とても悲しいと思います。たくさん、主に短編の作品がありますが、最も印象に残った次の作品について感想を述べます。

## 【カンナニ】 湯浅克衛 (1935年発表)

著者の湯浅克衛は、1910年生まれ。子どもの頃父の仕事の関係で、朝鮮半島で生活していた作家です。物語の舞台は京城(今のソウル)1919年ごろ。日本人の巡査の息子で、12歳の龍二少年と、農夫だった父親が、日本人に農地を取り上げられたために、よその家の門番として働いている、14歳の朝鮮人の少女カンナニとの友情と、龍二少年から見た、周囲の日本人の子供達や、大人達の、朝鮮人への態度や感情、そこに起こる悲劇の物語です。

龍二とカンナニは、近所に住んでいたの仲良しになるのですが、龍二の通う小学校の生徒たちは、朝鮮人の子供たちを見下しており、決して一緒に遊びません。彼らの親も、自分の子が朝鮮人の子供たちと遊ばないようにさせています。でも龍二の両親は、そのような差別をしない人たちで、二人と一緒に遊んでも、止めようとはしません。龍二の家の近所の朝鮮人の人々は、カンナニを含めて非常に貧しく、夏になるとマクワウリばかり食べていて、洪水で家が流されているような時にも、マクワウリが川を流れて来るからといって、氾濫している川にマクワウリを取りに入り、中には流されてしまう子供すら出てきたりします。二人が遊んでいる様子は牧歌的なのですが、そんな中で事件が起きます。

ある日龍二が学校から帰る途中、二人の朝鮮人の少女が、数人の日本人の中学生の男子生徒たちに絡まれているところに出くわします。龍二が見ていると、一人の少女は逃げられたのですが、もう一人の少女は、足をすくわれて地面に引き倒され、逃げようとしてもがくうちにチマ(朝鮮の民族服の袴のようなもの)が下着もろとも下がってしまいます。それを見た少年たちの一人が、少女の局部に地面から拾った

木切れを突き刺し、少女の足に血が流れるのを龍二は見失ってしまいます。龍二は少女がカンナニだと思って、助けに駆け寄るのですが、少女の顔を見ると人違いだったとわかります。中学生たちは逃げ去りますが、翌日、龍二は小学校の授業中に、その時にあったことをそのまま作文にして、教室で朗読してしまいます。それを聞いた日本人の先生は顔色を変えましたが、何も言いませんでした。

龍二は悪い中学生たちが罰されるだろう、と思ったのですが、結局何もなかったことにされてしまいます。

その後しばらく二人は会えず、会えなくなった龍二に会いに、寒い雪の中、カンナニが外から呼びにきて、龍二のいる部屋の窓の障子紙に穴を開けて呼びます。外に出てきた龍二に、カンナニは、作りかけの小さい巾着袋を見せ、「できたら龍二にあげる。」と言います。その袋には、二羽の鳥が刺繍されていて、「この鳥は龍二と自分だ」とカンナニは言います。

京城は朝鮮総督府のあるところですから、日本人の住民は多い方ですが、それでも 1910 年の朝鮮併合以後も、日本の占領政策に怒りを持つ朝鮮半島の人々の抗日運動は続き、住民たちの中では少数派だった日本人は、朝鮮人に囲まれた中に住みつつも、朝鮮のことばを覚えて仲良く暮らそうとはせず、見下しながら怯えて暮らしているところがありました。

そんな中、1919 年三月一日、3・1 独立運動が起こります。京城で、日本からの独立を求める運動に火がつき、朝鮮半島全土の民衆が隆起し、日本は、武力でこれを鎮圧しようとしてきました。

そんなある夜、カンナニの父親が龍二の家に「カンナニがいなくなった。」と、血相を変えてやってきます。警察官の父とカンナニの父と一緒に、龍二もカンナニを探しに、雪の中を、カンナニの名を呼びながら探しますが、カンナニはとうとう見つかりません。

代わりに、カンナニが龍二にあげると約束していた、二羽の鳥を刺繍した小さな袋が血に染まって雪の上に落ちていたのです。

湯浅克衛は実際に朝鮮半島に職を得た父について、少年時代を朝鮮半島で過ごし、その後日本に戻り、日本の大学を出た人です。

カンナニの父の農地のように、朝鮮半島を植民地にした日本政府は、徴税のための調査だといって、農民たちの土地を奪い、日本人に安く売り渡したため、農地を取り上げられた農民たちは、生活が成り立たなくなり、他の仕事が見つからなかった人々は、職を求めて日本に移住したり、また、徴兵されて日本兵として戦争に行かされたり、日本が強制的に朝鮮半島の男性を徴用したため、多くの朝鮮半島出身者が、大企業の工場や日本各地の炭坑での労働や、建設現場の土木作業などに従事させられました。その人数は 70 万とも 80 万人とも言われています。戦後朝鮮戦争で分断された祖国に帰国した人もいましたが、様々な事情で、戻らなかったり、戻れなかった人も多かったのです。戦争中は日本人にされ、戦争が終わると日本国籍を剥奪されました。

なぜ現在も日本に、たくさんの韓国、朝鮮の国籍を持つ人々が日本に住んでいるのか、日本人は知っておいた方が良くと思います。

そのようにして、日本に強制または自分から、移住せざるを得なかった人々の子孫が、今も日本に暮らし、在日韓国、朝鮮人として、差別され続ける原因になっているのは日本の責任だと思うからです。

果たして少年時代の湯浅克衛と両親が、実際に龍二少年と家族のようだったのかはわかりませんが、この小説に限って言うと、両親も龍二少年も公平な日本人として描かれています。中学生の少年たちの

いじめかたは、度を越していて、普通ではないと思いますが。日本人の大人がそのような虐待をしているのを、見たことがあったのではないかと想像してしまいます。

当時の日本人は、植民地の人々を、同じ人間だとは思っていなかったからです。朝鮮人の少女がいなくなっても、龍二の父親のように日本人の警察官が探すことはなかったのではないかと思います。でも全体としては、当時の京城に住む人々の生活の様子や、木綿のチマチョゴリを着て、おそらくは当時の朝鮮の少女の髪型の、髪を一つに編んで背中に垂らしている少女、カンナニの姿が浮かんでくるような、当時の京城の町の風景が浮かんでくる作品です。

## 2◆ 映画「鬼郷」(クィヒャン) チョ・ジョンレ監督作品 (2015年製作)

タイトルの「鬼郷」の英語のタイトルは” Spirit's Homecoming”です。

「異国に連れて行かれ、家に帰れず亡くなった、慰安婦被害者の女性たちの魂が、故郷に帰る。」と言う意味だそうです。

この映画は、今もソウル日本大使館前で毎週行われている、「水曜日デモ」にも参加しておられる、日本軍慰安婦被害者で、「ナムムの家」に住んでおられる、姜日出(カン・イルチュル)さんの体験を元に、7万5千人の韓国、日本、カナダ、アメリカその他の人々の寄付で、14年かけて製作された映画です。

昨年二月から韓国国内で公開され、358万人以上が見たそうです。韓国以外ではアメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、ドイツでも上映されました。日本でも上映したかった監督は、日本中を回って、上映してくれる映画館を探したそうですが、一つとして上映できると言った映画館がなかったため、日本各地の地域で、有志の人たちが会場を借りて、上映されました。

私が見たのは11月で、王子の駅のそばの「北とぴあ」でした。会場には、主演の少女の役を演じた在日韓国人の姜河那(カン・ハナ)さん、チョ・ジョンレ監督、日本兵を演じた、二人の在日韓国人の男性も来場し、それぞれ挨拶されました。

「家族から引き離されて、故郷に帰れず、異国で亡くなった女性たちの魂に、せめて一杯の暖かい食事を食べさせてあげたい、二度と、軍国主義がもたらした苦痛の歴史が繰り返されないように。」と言う思いから、チョ・ジョンレ監督は、この映画は製作されたそうです。

チョ・ジョンレ監督は、2002年「ナムムの家」(慰安婦被害女性たちが暮らす施設)でボランティアをした時に、「燃やされる少女たち」と言うタイトルがつけられた、カン・イルチュルさんの描いた絵を見て、衝撃を受けたそうです(この映画の最後に、寄付者の名前が流れる場面に、小さくその絵が映ります。土に掘られた穴の中で、ガソリンをかけられて生きながら燃やされる少女たちの絵です。「ナムムの家」では、慰安所で受けたさまざまな暴力の PTSD から回復するための療法として、絵を描く女性もいるそうです。) 物語は1943年。慰安所にいる二人の少女と、生還して、今生きている一人のハルモニ(おばあさんの意)の生活が描かれます。

14歳のチョンミンは、両親と、のどかな農村に暮らす少女でしたが、ある日家に日本兵が来て、両親の目の前で無理やり連れ去られてしまいます。家から連れ去られる直前、お母さんにお守りを持たせられ、列車に乗せられたチョンミンは、同じくらいの年頃の少女たちと一緒に中国の慰安所に入れられます。何をされるかも知らず、小さいな部屋に閉じ込められ、すぐに日本兵の相手をさせられます。少して

も抵抗すると殴られ、刀で脅す兵士もいれば、持ち時間いっぱい、何もせずにただ休めと言う兵士も登場します。チョンミンはあまり学校に通っていなかったのか、日本語があまり話せません。当時の朝鮮半島では、女性は富裕な家の子以外は、小学校すら通わせてもらえないことが多かったようです。

日本語を使うようにと言う政策がとられていたために、日本人は朝鮮語が話せる人はあまりいず、学校に通えなかったために、日本語で命令されても、全く理解できない少女もいました。中には、中国語しか話せない少女がいて、おそらく現地で連行された中国人だと思われました。言葉が理解できないと、命令に従えず、余計に兵士から暴力を振るわれることになります。

一日中狭い部屋に閉じ込められて兵士たちの相手を強制される日々の中では、昼間外で見張られながら働く時や、部隊の移動とともに移動する途中に、他の少女たちと話せるひと時だけが慰めでした。国外に連行されて、現地の言葉が話せず、逃げて家にも帰れない中、乱暴な日本兵の相手をさせられる過酷な日々の絶望的な状況に耐え切れず、気が狂ってしまった少女もいました。

そんな絶望の中、一人の日本兵がチョンミンに地図を渡してくれたことから、チョンミンと少女たちは、慰安所からの脱出を試みます。一度は失敗した後、中国兵の来襲によって、逃亡のチャンスが訪れますが、チョンミンは日本兵に撃たれて死に、他の少女や死んだ日本兵と一緒に穴の中で焼かれてしまいます。

一人生き残った少女（イルチュルさん）は、韓国に帰還し、その後もずっと一人で働いて暮らしていましたが、ある日テレビの「日本軍の慰安婦被害者の方を探しています。」と言う放送を聞いて、役所に名乗り出ます。（これは随分勇気がいっただろうと思いました。若い職員たちがいて「本当に慰安婦だった人が名乗り出たりすると思う？」と話しているところに進み出て、「私が被害者だ」と名乗ると言うのは。）

被害者として名乗り出た頃、元慰安婦被害者の女性は、性暴力を受け、言葉を失っていた10代の少女を、養女として迎えることになります。

少女はムーダン（巫女）で、死んだ人の魂が乗り移ると、その人の言葉を伝えることができる能力を持っていました。白い衣装を着てムーダンの舞を舞う少女に、あの日殺されたチョンミンの魂が宿り、今ハルモニ（おばあさん）となった女性に、亡くなったチョンミンが語りかけます。一緒に逃げられなかったことをチョンミンに詫げるハルモニ。

元慰安婦被害者の女性が引き取った少女を通じて、性暴力は、戦争が終わった今も、女性たちの魂を殺し続けている、今に続く問題なのだという事、この映画は伝えています。

最後のシーンは、チョンミンのふるさとの美しい田園風景の中を、たくさんの蝶が飛んで行く場面と、蝶が田舎の家の庭にいるチョンミンのお母さんとお父さんの元に来て、親子三人が家の中で笑いながら話している声で終わります。

実在するカン・イルチュルさんは16歳（15歳と言う説も）の時、慶尚南道の家から、中国の牡丹江の慰安所まで連れて行かれて、発疹チフスにかかり、他のチフス患者の少女とともに、地面に掘られた穴の中で、生きながら焼かれたところをなんとか逃れて帰国したのだそうです。

どうして日本では「鬼郷」が上映できないのか、本当に残念です。日本人が一番見る必要があるのに、と思います。

「慰安婦は売春婦」などと被害者の方々を侮辱し続けている、政治家や日本会議の方々や、そのような

妄言に共感する人々が。「反日映画」とさんざん悪口を言っていることが、ネットを検索すれば出て来ますが、反日の映画だとは、私は全く思いません。

なお、この映画を見たときは、寄付を千円以上ということだったので寄付もした後、DVDも買ったのですが、字幕なしなので、セリフがわかりません。(日本兵が話すところだけわかります。)

私は、韓国製のDVDを見ながら、日本語がわからないのに、「命令に従わない」と殴られた少女たちのことを思ってみずにはられませんでした

### 3◆「この世界の片隅に」 監督・片渕須直(2016年製作) 原作漫画 こうの史代

去年11月に封切られて以来、全国各地で、ずっと上映され続けている大人気のアニメーション映画です。

原作は「夕凧の街桜の国」という、以前実写で映画化された、原爆に被爆した広島的女性と、その弟と弟の娘の漫画を描いた、この史代さん原作のアニメーション映画です。(「夕凧の街桜の国」は私の大好きな漫画です。)

舞台は広島県の呉、戦艦大和の母港でもあります。1944年、広島から18歳で嫁いで来た浦野すずという女性が主人公で、1944年から、終戦、その少し後までを描いた作品です。これは「私のおすすめ3作品」なのに、実は私はこの映画をあまり面白いと思わなくて、むしろしらけてしまったのですが、世間では非常に絶賛されていて、すずの声を演じた「のん」さん(NHKの「あまちゃん」の主人公を演じた能年玲奈さん)も監督も、映画共々様々な賞を受け、日本中で引っ張りだこで飛び回られているようです。

ネットでこの映画のタイトルを検索されたら、どれほどこの映画が皆さんに好かれ、感動を与えているかわかると思います。とにかくこの映画を悪くいう人は、不思議なほどほとんどいません。

主人公の「浦野すず」は、絵がとても上手なのんびりした性格の女性で、海苔を作っている家に、兄と妹の三人兄弟に生まれ、12歳の頃に海苔を配達に行く途中、毛むくじらの化け物?にさらわれて、背中のカゴに入れられてしまい、その中にいた、将来の夫となる男の子周作と知り合い、後に結婚することになります。夫のいる呉の街に、親の言うまま、どんな人かもわからず嫁いで行き、夫が亡くなって実家に戻って来た義理の姉や、その娘。義父母と暮らす生活が、淡々と丁寧に描かれていきます。乏しい配給の食品を工夫して、摘んだ野草も使って、病弱な姑に代わり、かまどで料理をするすず。楠公飯(コメを煎ってから水を沢山入れて、火にかけた後箱に入れて保温して炊く)など、実際に戦争中に作られていた料理の作り方が詳しく描かれていたりします。

義理の姉の径子はすずと厳しく接しますが、姉の娘の晴美とは仲良しになります。やがて呉にも空襲が始まり、すずが義理の姉と晴美と一緒に、怪我した舅を病院に見舞いに行った時、すずが晴美の手を引いて道を歩いている時に、道端に落ちていた爆弾が爆発して、晴美は死んでしまい、すずは晴美と繋いでいた方の右手を失ってしまいます。「あんたがついていながら」と責める径子。

怪我で家で養生している時に、さらにすずの実家(広島市の江波)のある広島に原爆が落とされ、呉でも大きなキノコ雲が見えます。すずは実家の様子を見に行きたくても、怪我のために、すぐに行けず、その間に広島の実家の両親は原爆で死に、やっと実家の様子を見に行けた時には、ひとり寝込んでいる妹

の腕にはあざがあり、兄はすでに戦死しています。右手を失い、でも常に明るく振る舞うすずは、戦後軍属だった夫が、職を得た広島で、母親を原爆で亡くした小さい少女に出会って連れ帰る。というストーリーです。

漫画は、上中下の3巻で、かなり忠実に映画化されていて、原作者のこの史代さんも満足しておられます。ただ、2巻目の分の話は大幅にカットされていて、戦艦に乗る海軍の兵士のすずの幼馴染の男性水原哲が、出撃前にお風呂をもらいにすずの嫁ぎ先に来て、夫が納屋に泊り、母屋の鍵をかけて、妻であるすずを締め出して、ふたりきりにするところは映画にも使われるのですが（どうやら夫は幼馴染の哲のことを、すずが好きだったのではないかと思っていたように描かれるので、浮気してもいいの？と不思議に思う人がいるシーン）

原作の漫画では、夫の周作は、遊郭にいる「白木りん」という名の女性が好きで遊郭に通っており、すずと結婚する前に、りんとは結婚したいと思っていたことを、りんとは親しくなったすずは知ってしまい、嫉妬するところがあるのですが、それは全くカットされ、小さい頃、祖母の家に行った時と、夫の勤め先に届け物に行き道に迷った時しか、りんは出て来ません。（戦争でひどい目にあわずに、それ以上辛い思いはさせたくなかった、とカットした理由について監督はインタビューで答えています。）

主人公のすずに対して監督はそうとう深い思い入れがあるようで、自分の理想のすずさんを描きたかったのかなと思われる。（夫が遊郭に通い、りんが好きだったことを知らず、嫉妬も持たない純真無垢な女性というか）

すずの声には、最初からのんさんを想定していたそうです。のんさんの声は広島弁ですが「すずさんにぴったりだと言う人が多いようです。私には「のだめカンタービレ」というドラマと映画で、上野樹里さんが主人公の「のだめ」を演じた時の声とよく似ているなと思いました。どちらかという幼い感じの、のんびりした甘えたような声です。

映画の方で、私が「なぜこうしたんだろう」と不思議に思った原作と違う所は、映画の最後の方で、玉音放送を聞いたすずが珍しく大声をあげて「どうしてまだここに五人もおるのに、片手と両足が揃っているのに戦わないのか」と泣いて怒るシーンで、庭に飛び出したすずの目に、太極旗（韓国の国旗）が一つはためいているのが目につき（おそらく日の丸をリメイクしたものでしょう）、「暴力で従えとったことか。だから暴力に屈するということかね。」「知らないで死にたかった。」と地面に突っ伏して泣くシーンのセリフを「海の向こうから来たお米や大豆なんかで私はできていた。」とかいうセリフに変えられた所。（監督は「その方がすずさんらしいと思ったそうです。でも旗を描かないことは逆に政治的だと思ったそう。」です。

他には、原作通りなのですが、大きな違和感があったのは、すずが、呉の港を臨む高いところにある家の畑で、野菜を作る合間に、戦艦が好きで詳しい義理の姉径子の娘晴美のために、沖の戦艦をスケッチしていて憲兵に捕まえられ、スパイだと疑われたのに、なぜか家族は「すずさんがスパイだなんて」と、叱られて憲兵に連れられて家帰ったすずを叱らずに、みんなで笑い転げていたり（憲兵に捕まることは笑って済むことだったのか？と私は思ったのですが）。

原作の漫画は、1968年生まれの広島市出身のこの史代さんが、歴史資料を調べたり、当時の人にも話を聞いて知った事を注としてページの枠外にあちこち書いていて、映画版の方も、監督も丁寧に時代

考証をしていて、「戦争当時の広島や呉の庶民の生活を、丁寧に描いている」とか「戦闘機の爆撃の音が、防空壕の中でどんな風に響いていたのかリアルに再現されている。」とか、「戦艦が本当に細部に至るまで緻密に描かれている。」「コトリングの音楽も最高」、「のんさんの声は、すずそのもの」と感心されているのですが、私には、妖怪にさらわれて将来の夫と出会う最初のシーンからすでに、メルヘンの世界に入ってしまったようで、リアルは捨てたのかなと思ってしまいました。

「普通の幸せの延長が、戦争によって断ち切られる悲劇を描いている。」「イデオロギーを押し付けず、政治的でもなく、声高に戦争の悲惨さを語らない良い映画。」「残酷なシーンをあえて使わないで戦争の悲惨さをみごとに描いている。」という評価が、私にはあまり腑に落ちないのですが、「この世界の片隅に」は、去年の日本のアニメーション映画で最高の評価を受けており、「一生に見た映画の中で一番感動した。涙が止まらない」「もう5回も見た」「呉に行って映画を見ました。」と絶賛されて今もロングラン上映されており、映画に出てくる場所の地図も売られていて、映画に出てくる場所をめぐる「聖地巡礼」をするファンもいます。熱狂的に支持されているのは事実で、現代の若い人から戦争を知っている年配の人にまで賞賛される「リアルな戦争映画」と言われるこの映画を、今の日本人の戦争観を知るために、見てみるのは意味があると思います。

なお、この映画もクラウドファンディングで製作されたのでエンドロールに寄付した方がたの名前が出ます。

日本人のイノセントな可愛い若い女性の戦争による被害の映画なら、日本中どここの映画館でも上映できるのに、1925年生まれのすずさんより年下の、朝鮮半島から連れ去られた未成年の慰安婦被害者の実話を元にした映画は、どこの映画館でも上映されないし「反日映画」「日本を貶めるために作られた」と言われるのは悲しいし、おかしいなとやはり思います。

「すずさんのような人と結婚したい。」と言う男性の感想も多いようですが、「この戦争なら耐えられそう。」と言う感想はやはりショックでした。

「原爆投下後の破壊された広島がきれいすぎる。」と、広島出身の方がツイッターで感想を述べられていましたが、(この映画は好きな方)この映画の戦争の描き方は、子供に食べさせる魚のように、丹念に骨を抜いて、食べやすく調理された戦争映画なのでは、と私には思えました。

あまり主人公たちの被害を強調すると、「日本人の被害ばかりを描いている」と言われ、反戦を表にあらわに出すと、「反戦イデオロギー映画」と言われてしまうことが、広島を舞台にした作品を作る難しい所のように思えます。

なおこの作品のととても面白い所は、出てくる登場人物の名が、脇役に至るまで、全て周期律表に出てくる元素名を元にしてしている事。

「浦野すず」と言う主人公の旧姓の「浦野」は「ウラン」「すず」は「スズ」。嫁ぎ先の北条家は「ホウ素」、夫の周作は「臭素」義理の姉の「黒村径子」は「クロム」と「ケイ素」、姉の娘の晴美は「アルミ」と言う風に、親戚や幼馴染(水原哲の哲は「鉄」)近所の人の名まで、全部元素名からつけられている所でしょうか。(実際に原作者がそうやってつけたと言っている。)

そのことがこちらのブログに詳しく載っていました。

[「この世界の片隅に」の化学](#)

## ● 秋山和男

今年も私は、主として10代の若者たちにおすすめることを意図して書いています。なお、3項目とも市民科学研究所のHP上にある講座、インタビューの記録と関連させました。理由は、市民科学研究所のものはその分野の入門のものとしても分かりやすく、テーマに学問的な広がりもあり、10代の若者へ取り組んで欲しい学問案内、また市民の役割なども記載されているので、10代の方々にとって自分の課題のひとつに繋がるのではないかと考えるからです。

### 1◆「最相葉月さん、カウンセリングってどのような仕事なのでしょう？」

(市民科学研究所のHP「ホーム」の「キーワード検索」を使い「最相葉月」で検索できます。

この講座の内容は精神科医療だけでは無く、幅広く精神的に弱っている人、病んでいる人を支えるのに必要なことがらが述べられています。

関連する書籍は、

書籍A：『オープンダイアログーとは何か』（斎藤環著・訳、医学書院、2015）

イ：『その島のひとたちは、ひとの話をきかない』（森川すいめい著、青土社、2016）

ウ：『日常診療における精神療法——10分間で何ができるか』（中村敬編、星和書店、2016）

実はこの講座全体の特徴で、展開は最相氏のお話と参加者の質問、それに対する回答と進み、結果、「カウンセリングってどのような仕事」というテーマだけでなく話題は14項目にわたって、それが文字化された「見出し」で示されています。

以下文体は「である体」で。

最相氏自身の精神疾患への問題意識は、なぜ回復するのに焦点を当てたかった、と述べられた。そこで、中井久夫氏が統合失調症の病気の経過と、特に回復過程を観察によって明らかにしたことを、「見出し—中井久夫氏による寛解過程の発見」で述べられた。

「見出し—精神科治療における薬物療法について」では、患者が多すぎ、一人ひとりにコミュニケーションをとる時間が取れないなど、精神医療全体の問題が背景にあり、どうしても薬物が第一選択になる、と最相氏は述べている。

精神科の診察については、最相氏は「今の精神医療ではきっちりカウンセラーと分担されますね。お医者さんは初診では30分ぐらい話は聞いてくれるのですが、その後はだいたい3分から5分ぐらい、…そこで医学的な側面だけで対応するってということが今は一般的です」と、『日常診療における精神療法——10分間で何ができるか』では、ある大学病院で初診は1日に4人までの枠にし、初診時間は30分から1時間で行って、アセスメントを行っている、と。最相氏も、正しいアセスメントがないと病気の診断を間違えて、不適切な薬の投与が実際にあり、双極II型の患者に、抗うつ剤を投与し、躁転で躁状態になって、大変な状況になった、と（「自殺」のことか：中村敬編『日常診療における精神療法』でも、双

極性障害は最も難しく、自殺との記述がある)。

この本を手にしたのは、最相氏のいう診察時に時間を掛けた治療やカウンセリングが行いにくくなっている、とのことに、現場ではどのように病気治療がなされているのか知りたくてであった。また、一方この本を企画した編者たちは「最近の若い精神科医は、精神療法に対する関心は総じて希薄で、操作的診断基準と薬物アルゴリズム (algorithm: 問題を解決するための具体的な手順。問題解決の手法: 引用者補う) でコンビニエント (convenient: 便利な。: 引用者補う) な診察が好まれている」(1頁)、という。その傾向に対し、精神療法の力と、医師の努力の様子が伺える本で、最相氏の講座の補いにもなった。

再診では最相氏も話されたように短時間での診察なので、さまざまな工夫がなされていることが、『日常診療における精神療法』にある。以下のことは患者との短時間のコミュニケーション等で実施し、回復に向けて取り組んでいる内容である。

- ・診察に前回との連続性を持たず。前回課題にしたホームワークを振り返る。
- ・ワンポイントアドバイスの助言を行う。特にうつ病には、森田療法的養生法を。
- ・初診時患者に治療は協同作業で一緒に作り上げていくものと説明。

もし「協同作業で一緒に考えていきましょう」と言える関係ができれば、それはすでに精神療法的な関わりが始まっている」と(15頁)。

・最初の7日間の臥褥(がじょく)の効果は大きく、徹底した休息を取らせる。休息は停滞していた回復過程を勢いづける発火点になり得る。

・薬の処方時、残薬を確認し、不足分だけ出す。それを3、4回続けると段階的にアドヒアランスが向上し、しっかり飲むようになり、それが回復にもつながる。薬を飲む飲まないは、治療者への(また薬への)信頼度のバロメーターでもあり、必要に応じ薬の説明を丁寧にし直す。

などなど。

さて、最相氏の講座は「カウンセリングの歴史」「精神医療やカウンセリングの制度的な面」「カウンセリングの役割」なども述べられた。

講座の途中、参加者からの次の発言で(見出し「精神科治療における薬物療法について」のところで)「精神医療で各国の比較をしていて、日本は突出して薬物投与の量が、桁違いに多いってというような報道がなされ……最近、また齋藤環さんという精神科医のお医者さんの『オープンダイアログ』というの(を: 引用者補い) ……提案され……と、いうようなところを見ていて。……個人に対するケアとか医療といったところと、社会、私たちの置かれた社会の状況とかという……その循環……という話にまた戻って」と。その後、精神的な病いと、それに対してキュア、ケアする専門家、支える隣人や社会、悩む個人の変化などが、話された。

見出し「『向き合う』ということの意味」「災害時の心のケアについて」「問題に対処できるだけの精神的な支えをすること」にその展開が書かれている。

この他者と向き合い、支え、寄り添うことは実は言うほど簡単ではないと、『日常診療・』の記述にも、患者への医師のある一言で患者が離れていく姿が記されている。また、藤井理恵氏(淀川キリスト教病院、ホスピスでの牧師、チャプレン、臨床パストラル・カウンセラー)が「寄り添うこと」の難しさを、「私たちは人と関わる時、何とか自分の努力が報われたい、その関わりの成果を見たいと願うもので

す。そして成果を上げること自体を関わり目的としてしまうことがあります」（『たましいのケア』53-54頁）。藤井氏はあのマザー・テレサでさえ相手にとってよい寄り添いができたか自問自答していた、と。最相氏は、あなたが辛いってことを確認してくれる人がいるということが、大事で、対処できるだけの精神的な支えをするということがカウンセラーの役割なのです、と。医師や学校長の苦しみもその専門的な知識等なくても支えられるとも。

さて、先ほど出てきた「オープンダイアログ」とは「開かれた対話」で、斎藤環氏はオープンダイアログとは、患者やその家族から精神疾患の相談依頼の電話が掛かってくると24時間以内に、患者、家族、親戚、医師、看護師、心理士、本人に関わる重要な人物を含めて、ミーティングを開き、危機が解消するまで毎日のように続けられる、と。これによって統合失調症の画期的な成果が得られている。統合失調症の入院治療期間は平均19日間短縮され、2年間の予後調査で82%は症状の再発がないか、ごく軽微である（対照群では57%）、と。

支える隣人や社会については、森川すいめい氏の報告から考えさせられる。これはオープンダイアログとも関連させて書かれている。森川氏は精神科医で、全国の「自殺希少地域」を5箇所訪ねる。それらの地域は、「困っている人がいたら、即助ける」という所。それらの地域とオープンダイアログの取り組みがいくつも共通していることを最期に報告している。

この他者との向き合い、支え、寄り添うことについては、最相氏のお話と実践者から私たちは学びながら一つひとつ身につけていかなければならないのだろう。

見出し「自分の悩みを悩めない若い人たち 認知行動療法のこと」「コミュニケーションの問題はどこから来るか」も考えさせられることが多い。長くなるので略す。

## 2 ◆食事と健康：何がその混沌を生んだのか ～科学的な理解と実践に欠かせない基本を考える～

佐々木敏氏

（市民科学研究室のHP「ホーム」の「キーワード検索」を使い「佐々木敏」で検索できる。

関連する書籍は、『社会を変える健康サイエンス——健康総合科学への21の扉』（東京大学医学部健康総合科学科編、東京大学出版会、2016）

佐々木氏はこの本の20章「人類は塩とどうつきあってきたのか？——食を科学する栄養疫学」を書いている。

この本の構成は

第I部 ヒトと環境の科学 1章から6章

第II部 ひとが生きることを支える科学 7章から12章

第III部 人と社会の健康をつなぐ科学 13章から20章

終章 健康総合科学とヒト・ひと・人

このように、生態学、遺伝学、看護学、保健社会行動学、疫学・予防保健学、健康教育・社会学、発達医科学、生物医科学、健康環境医工学、放射線分子医学、医療倫理学、健康増進科学、臨床情報工学、予防疫学、看護学は母性、精神、家族、高齢者在宅長期ケア、老年、地域看護と、多岐にわたっている。

佐々木氏も他の章の最後と同じように、さらに詳しく知りたい人、より学問的に学習したい人のため

の本の紹介をしている。

なお、15 章ではニューヨーク市が肥満対策に「ビッグサイズの高糖清涼飲料水の規制」を打ち出したが、ニューヨーク高等裁判所はこれを拒否する判決を下したことから、何が必要だったのか、述べられていて、市民科学研究室の活動とも関連して、若者の学習用としても面白い内容。

### 3 ◆ 「毒性学からみた放射線の人体影響」

菅野 純氏 市民科学講座 A コース (2015 年 10 月 03 日)

(市民科学研究室のHP「ホーム」の画面一番下「カテゴリー」→「活動と資料」→「低線量放射線」で検索できる)。

ここでは、毒性学の入門者向けの書籍の紹介を。

『体の中の異物「毒」の科学—ふつうの食べものに含まれる危ない物質』(小城勝相著、講談社ブルーバックス、2016) が分かりやすい。

『毒性の科学—分子・細胞から人間集団まで』(熊谷嘉人・姫野誠一郎・渡辺知保編 東京大学出版会 2014) と『新版 トキシコロジー』(日本トキシコロジー学会教育委員会編、朝倉書店、2009) は、容赦なく専門用語が出てきて、私には全てを理解するには難解。また、これらの書籍には図解はあるけれど、顕微鏡写真など少なく、菅野純氏のものは、映像がカラーではっきりしていて分かりやすい。また、図表も分かりやすい。

## ● 泉とも花

「早くおすすめ3つ紹介してくれないと、僕がエアともちゃんになって代わりに書きちゃうよ！」と上田さんが面白いことを言うので久しぶりに「私のおすすめ3作品」に投稿します。

### 1 ◆ いか文庫

店舗もなければ取り扱ってる本もない。

それでも毎日どこかで開店している「エア本屋」さん。それが「いか文庫」。

エアギターは世界選手権が開催されるほど有名だけど、本屋さんをエアーで存在させてしまうとは！！

「エアトラベル」「エア大学生」「エアケーキ屋さん」……

エアをつければ可能性は無限大になるんじゃないか？

### 2 ◆ アニメ「ユーリ!!! on ICE」(アクセスすると音が出ます)

アニメ好きだけでなく、今まであまりアニメに触れたことがなかった層も巻き込んでいる日本発の本格フィギュアスケートアニメ。言葉の壁も軽々と越え、世界中の人々の心を掴んで離さない「魔性のアニメ」です。Amazon プライム会員は全話見放題です。

### 3◆『むしにくいノート』 ムシモアゼルギリコ 株式会社カンゼン

昆虫食を楽しく紹介している本です。

私が昆虫食のことを知ったのは、市民研の手伝いでDVDタイトル入力作業をしているときにみた食糧危機に関する番組がきっかけでした。私の出身地ではイナゴを食べる習慣があり、スーパーのお総菜コーナーに行けば今でもイナゴの佃煮が売られていますが、人生でイナゴ以外の虫を食べたことがなかったのでこれを機にちょっと調べてみたくなりました。

調べたら体験したくなる。というわけで、昨年のサイエンスアゴラでは昆虫料理研究会のブースに遊びに行き、昆虫料理研究家の内山昭一さんに質問しながら昆虫料理5~6品をご馳走になりました。なかでも、ポン酢でいただいたハチの子しゃぶしゃぶは、銀座の高級料亭で出てきそう（行ったことないけど）な上品な味で、また食べたいと思っています。

## ● 橋本正明

### 1◆ドキュメンタリー『独裁者の部屋』

スウェーデン教育放送（UR）制作番組。2016年春にNHK教育で全8回放映された。

架空の独裁体制で暮らす若者たちを追ったドキュメンタリー。

これは一つの擬似社会における人間行動に関する戦慄を覚えさせるような実験である。

だがこの実験が今の我々と密接な関係があることに気が付いている者はどれだけ居るだろうか。

初めは軽い気持ちで参加していた人々が次第に『独裁者』から否応なしに繰り出されるミッションをこなすうちに次第に『独裁者』の術中に嵌まっていく姿は異様である。

強固に見えた彼らの結束は『独裁者』の仕掛けたワナによって、猜疑心を植え付けられ脆くも崩れ去っていく。それは我々が直面している危機を表していると言えないだろうか。

回が進むにつれ、次第に参加者の間に暗雲が立ち込め、次々と脱落者がコミュニティから消し去られてゆく。そして最終回。

近いうちに我々が迎える局面は、果たして彼らが迎えた最終結果とどれ程の違いがあるのだろうか。

私は完全な合致という恐ろしい結末もまたその有り得べき未来の一つではないかと危惧して止まないの

である。  
願わくば、私の危惧が外れてくれることを…

## 2◆ ETV 特集「原発に一番近い病院 ある老医師の2000日」

これは原発事故直後からの過酷な医療現場において孤軍奮闘し、地域の人々と医療の限界に向き合っていた或る老医師の生前の姿を追ったドキュメンタリーである。

しかし、それは正確ではない。2016年秋の放映時にはまだその医師は存命であったのだ。

彼は診療を受けている殆どの患者以上に高齢であり、満足に動かなくなりつつある四肢に鞭打って当に献身的な医療を行っていた。

そしてこのドキュメンタリーの最後の場面でも、自分が負った使命のようなもの、あと10年は医療現場に携わらないとそこから解放されないであろうこと等を訥々（とつとつ）と静かに尊厳に満ち溢れた言葉で語っていたのだが。

その僅か2ヶ月後に発生した火災によりその命が失われたのは、地域の住民や患者達だけでなく、我々の社会においてもまた大きな損失なのである。

いや、少なくとも彼の最後の姿は我々のため、後世の人々のため残された。

我々は彼のその後ろ姿をしっかりと眼（まなこ）に焼き付けねばならない。

そして自ら襟を正し、律しなければならない。

まだ、過酷事故は終わってはいないのだ。

## 3◆ BACK NUMBER 『青い春』

音楽的には結構、ミスチルやスピッツ、スキマスイッチなどに似た雰囲気の一昔前に聞き慣れたフレーズが多く耳触りがよいバンドである。

この曲もタイトルからすれば、散々昔から使い回された内容のように思えるのだが。

その2番の歌詞には冒頭からドキリとさせられるのである。

♪

「まあ、いいや」が増えたのは、大人になったからじゃなく

きっと空気の中にヘンなものを

俺らが考え過ぎんのを、ヨシとしない誰かさん達が、混ぜて垂れ流しているんだろう…

♪

この歌詞は余りにも現代社会の病んで腐りきった現状を鋭く指摘している。

今の我々に迫りくる危険を恐ろしいほど正確に…

そしてそんな青い刻はとうの昔に過ぎ去ったはずの我々もまた這いつくばりながら踊り続けるのである。

例えそれが正しいリズムではなくても…

## ●網代太郎

## 1◆映画「袴田巖 夢の間の世の中」

2016年一番のおすすめ映画は「この世界の片隅に」ですが、これは、もうわざわざここでおすすめする必要もないほどの絶賛大ヒットです。

袴田巖さんは48年間の獄中生活の後、2014年3月の静岡地裁による再審開始決定により即日釈放となりました。釈放後の日々を追ったドキュメンタリー映画です。長い拘禁生活と、いつ死刑が執行されるかわからない恐怖の中で、巖さんは"妄想"の世界に生きることでもかろうじて精神を保つようになりました。釈放後も妄想の世界の中にいるままなのですが、とても強くて明るくてすてきなお姉さんとの同居生活を経て、袴田さんは少しずつ変わっていきます。深刻なテーマにもかかわらず、何度も笑えた映画でした。袴田さんは再審無罪となったわけではなく、再び収監される恐れすらあることも否定できないことを考えると、この国の司法は本当に問題だと思います。

## 2◆書籍「スマートメーターの何が問題か」網代太郎著

私が書いた本ですが、自信を持っておすすめします。海外諸国で、市民や消費者団体が反対の声を上げている／上げた「すべての電気メーターの、スマートメーターへの置き換え」が、この国でほとんど話題にもなっていないという一点だけとっても、この国が民主主義の点で後進国であると痛感いたします。

## 3◆書籍「日本史のなぞ なぜこの国で一度だけ革命が成功したのか」大澤真幸著

日本には過去、一度だけ革命があった、その革命を起こしたのは織田信長でも明治維新の志士でもなく、北条泰時だったと論じる一冊。その結論じたいについては私は（日本史にはあまり詳しくないこともあって）そう言えばそう言えないこともないけど……という感想でしたが、海外諸国と比べて変えることが難しいこの国を変える条件とは何か等々、いろいろ考えさせられ、おもしろかったです。

## ●上田昌文

## 1◆手塚治虫『陽だまりの樹』（小学館文庫で全8巻）

2016年をはさんで今に至るこの2年ほど、地元文京区を中心に「まち歩き」を精力的に行ってきた。そのなかで、古地図を手がかりに東京の地形や地理、歴史を読み解き、江戸から東京にいたるまちの姿と人々の生活の変遷を辿る本や雑誌が無数とあっていいほど出ていることがわかった。ごく限られたものしか目を通してないが、それでも、そこに記された場所（の一部）を実際に訪ね歩くことで「まちの解説」の面白さを満喫させてもらった本は十指に余る。竹内正浩『地図と愉しむ 東京の歴史散歩』（中公新書、「地形編」「都心の謎編」「お屋敷のすべて編」「地下の秘密編」の4冊が続編として出ている）はその最も手頃な一冊かもしれない。藤森照信+荒俣宏+春井裕『東京路上博物誌』（鹿島出版会）はマニアックな観察眼を働かせてあらゆる建造物（風景や図像や看板なども含む）からそれにまつわる文化の来歴を解き明かす、好奇心を刺激して止まない本だ。荒俣宏には『江戸の幽明—東京境界めぐり』（朝日新書）もあり、江戸・東京の区割りがどうなっていったかを探りながら、各所に点綴された風俗史を絵巻のように描き出している。

文京区まち歩きの一環として、東京大学の医学部の界隈を何度も巡り、日本の近代医学の形成に関する基本文献もいくつか探したが、そんな中で出会ったのが、[「江戸東京医史学散歩」のサイト](#)を主宰する堀江幸司氏だった。実際に歩き、文献を確かめ、今では入手し難い写真・図版にも現物にあたって、長い時間をかけて作られた、重厚なデータベースとでも言うべきインターネット上の労作だ。

日本の近代医学成立史は蘭学、ドイツ医学、英米医学を、医学教育や医療機関や医療制度を含む全体をどう摂取し根付かせてきたかの、学問・人・政治がからまった格闘の歴史であり、主要な登場人物だけでも100人近くに及び、その人物相関図はかなり入り組んでいる、と言えるだろう。ただ幸いなことに、その歴史のアウトラインを知る上で絶好の2つの手段がある。

一つは、[「順天堂大学 日本医学教育歴史館」](#)。設立されてまだ3年にならない、新しい博物館だが、日本の医学の歴史を、実際の史料（文書、図版、実物等々）を観ながら、集中的に学べる、得難い施設だ。そこで入手したカタログ『歴史でみる・日本の医師のつくり方：日本における近代医学教育の夜明けから現代まで 第28回日本医学会総会医学教育史展』（酒井シズ ほか編集 2011）もじつに読み応え・見応えがある。

そしてもう一つが手塚治虫の『陽だまりの樹』（小学館文庫で全8巻）である。

手塚治虫の作品で「歴史物」と言えそうなものとしては、『一輝まんだら』『奇子』が大変強烈に印象に残っているが、2人の主人公を配して大河ドラマ的で完成度が高いという意味では『陽だまりの樹』と『アドルフに告ぐ』が双璧をなすように思う。黒船来航から戊辰戦争までの時期の幕政の終焉のなかで、苦闘し翻弄される人間を描いているが、片方の主人公である手塚良庵は、適塾で緒方洪庵に蘭学を学び、父の良仙とともに種痘所（後の西洋医学所、東京大学医学部の前身）の創設に関与した実在の人物であり、手塚治虫の曾祖父にあたる。西洋医学の普及に尽力した医師らの姿が活写されているのが、この漫画のも

う一つの醍醐味である。国際的な文脈に日本の牛痘種痘の導入史を位置づけたアン・ジャネッタ『種痘伝来 日本の<開国>と知の国際ネットワーク』(岩波書店)と併せて読むとさらに作品の味わいは増すだろう。

幕末から明治維新へという、日本史上の最大の転換期を人々はどのように乗り切ったのか—そのことを深く探索する意欲さえあれば、おそらく私たちは非常に多くのことをそこから学べるに違いない。以前読みかけてはみたが読み切れなかった大佛次郎の大長編『天皇の世紀』にも、再度挑んでみようかなと思っている。

## 2◆バルトーク ピアノ協奏曲集 (第1番、第2番、第3番)

ゾルターン・コチシュ (ピアノ) イヴァン・フィッシャー (指揮) ブダペスト祝祭管弦楽団

皆さんは「全集を読む、聴く、観る」という作品(というより創作者)との付き合い方をどれくらさされているだろうか。

私には、十人に満たないのが残念だが、初期の習作や手紙も含めて、そのすべての作品を自分で読んだり、聴いたりした(あるいは今もしている)作曲家や文学者が何人かいる。その創作者の生き方、考え方、感じ方、そして作品に込めようとした意図、創作の技法、社会との関係性、時代性の刻印と制約、それを超越する普遍性……やはり最も深くいろいろなことが見えてくる付き合い方が、この「全集」方式だと思っている。

ハンガリーの大作曲バルトークは、高校時代に初めて聴いて衝撃を受けて以来、長年をかけて「全集」を聴いてきた創作者の一人だ。声楽作品や合唱作品に CD 化されていないものがあることがわかっていて、だからと言って、40年ほど前に一度だけ発売された LP の全集を探し求めるわけにもいかず、困っていたが、ここに来て立て続けに(2015年と2016年)、2種類の全集が出た。私は、廉価なほうの [Decca レーベルのもの \(32 枚組\)](#) を手に入れ、ゆっくり聴き進めている(声楽作品のすべてに英語対訳がついているのが嬉しい)。

ここでは、この全集の中にも収められている演奏での、バルトークのピアノ協奏曲集を挙げておく。というのは、バルトークの音楽の解釈や普及に最も力あった音楽家である、ピアニスト・指揮者(作曲家でもある)ゾルターン・コチシュが2016年に亡くなり、その追悼の意を込めて、いかにこの3曲の演奏が、精緻で生命力が漲った、素晴らしいものかを記しておきたいからだ。単発のCDは廃盤となっているが、幸い youtube に3曲とも挙がっているので、聴いてみて欲しい。

### [第1番](#) [第2番](#) [第3番](#)

2016年は『父・バルトーク ~息子による大作曲家の思い出』(ペーテル・バルトーク(著)、村上泰裕(翻訳)、スタイルノート2013)を読んだ年でもある。じつに丁寧な翻訳で、バルトークの音楽にあまりなじみのない人が読んでも、この稀有な人物から放射される、常に本物を求め非妥協的であった精神の輝きを感じとることができるだろう。随所に断片的に添えられた楽譜もまたその時々の子の心のやりとりを想像させたりして、面白い。

## 3◆『失われてゆく、我々の内なる細菌』（みすず書房）

「病と健康」の概念を変えていく力のある一般向けの科学書を挙げてみたい。どれも原著は多くの部数が売れた本で、ネット上にもいくつも書評がでている。それらを手がかりに、参考になりそうなものを選んでみてほしい。私は、「生活習慣病、アレルギー、喘息、自己免疫疾患、行動障害、認知症などが減る兆しがないのはなぜか」という問題を中心にすえて、その解答を多方面から探るための手がかりとしてこれらの本を読んだ。

\*M.J.ブレイザー(著)、山本太郎(訳)『失われてゆく、我々の内なる細菌』（みすず書房）

「とりあえず抗生物質を使う」ことや「除菌・殺菌があたりまえ」になっていることの恐ろしさを、常在細菌叢の最新の生物学の知見を用いて根底からわからせてくれる。英語の原著も非常に読みやすい。

\*M.ベラスケス=マノフ(著)赤根洋子(訳)『寄生虫なき病』（文藝春秋）

「寄生者の“不在”（原題は An epidemic of absence）が体内の免疫反応のバランスを乱し病をもたらしているのだろうか？」—大量の文献精査、インタビュー、はては自身の身体に寄生虫を入れての観察…に及んでの執念の探索の書。

\*R.M. ネシーほか(著)長谷川真理子ほか(訳)『病気はなぜ、あるのか—進化医学による新しい理解』（新曜社）

「発熱はなんのためにあるのか？」「窒息のリスクをかかえてしまうのに、呼吸器と消化管が同じ場所を通過しているのはなぜなのか？」という具合に改めて「病気・不具合はなぜ起きるのか」問い、進化の過程をふりかえることで、病気の起源と“役割”について考察している。

\*D.E.リーバーマン(著)、塩原通緒(訳)『人体六〇〇万年史——科学が明かす進化・健康・疾病』（早川書房）

人間が進化してきた環境と現代の環境のミスマッチに起因する多くの不都合が多くの疾患の原因となっていることを多角的に示している。